

# 常磐調査地域の概要(その2)

## 総合開発計画

### 鉱工業

#### 鉱業

##### 金属工業

本地域鉱業は日立市を中心とする金属工業および豊浦町、以西地域の石炭鉱業を中心として発達している。

金属工業の現在、稼行鉱山は日立鉱山、諏訪鉱山を初め小鉱山の経営するものがあるが、主体は日立鉱山、諏訪鉱山にあり、その鉱山物の種類は金、銀、銅、硫化鉄鉱を主とし、その他の小鉱山は金鉱を主としている。

この鉱山の紀元は天正19年(西暦1591年)佐竹義重により開発されたのを最初とする。後、徳川時代にも開発が続行されたが中途で廃絶し、明治に入り赤沢鉱山と呼ばれ、久原房之助氏の手に戻し久原鉱業所を起し、明治38年12月26日以来日立鉱業所と改称され経営着手したものである。買山3ヶ月目に第一出杭の採掘、中里発電所の建設、40年には本邦最初のダイヤモンド試さく機を使用

さく岩を開始、41年3月大雄院に製錬所を建設、助川に分銅所を設け10月には助川(現日立駅)大雄院 530mの鉱山電車を敷設し1ヶ月 3,600屯の金、銀、銅を出荷するようになった。大正元年10月10日久原鉱業KKと改組今日の基盤が確立したものである。

開山当時は埋蔵量が100万屯と推定されたが、現在までの採掘量は2,000万屯に達する状態である。なお、28年鉱床調査の結果800万屯の新埋蔵量が確認され年平均採掘量3万屯とみて30年度の稼行が見込まれ、本地域の最大産業である。

本年の産出量は地域内、他鉱山を含め銅鉱4,235屯、金鉱138屯、硫化鉄鉱15万屯を産出し、主として日立精練所において他鉱山よりの買鉱と共に精練される。硫化鉄鉱の20%は日立精練所において使用され自余の80%は、神奈川、愛知、三重、福井、大阪、山口、福岡、大分の府県27工場に出荷される。

銅鉱の一部は大分、佐賀、関に送られるものである。昭和29年硫化鉄の受給状況は次の通りである。

		茨城	神奈川	愛知	三重	福井	大阪	山口、福岡	大分	計	
受入	工場数	1	4	2	1	1	10	3	5	1	28
茨城県	出荷数	28,258 屯	66,335	6,144	20,674	473	2,957	3,506	1,420	3,196	149,449

##### 石炭鉱業

開発の沿革を辿るに安政年間、多賀郡華川村(磯原町)大塚本五郎が村内より石炭断層の上部露頭を発見、採掘を試みた記録が存するし黒前村にて燃える石を採出したとも伝う。明治に入つて個人経営で採掘を初め、明治11年には541屯、同16年には173屯の生産をみている。次で明治29年1月、多賀郡磯原町(現高萩市)に秋山炭鉱が創立され、同年8月磯原町に茨城無煙炭株式会社が起ち明治34年茨城探炭株式会社の創立をみた。石炭採掘業は年を追つて盛況をきわめるに至つた。

##### 生産状況

茨城炭田の出炭状況は明治末より大正年代には30万~70万屯であつた。第一次戦争後の出炭テンポは早くなり昭和27年には32万屯台に低落しているが第二次大戦と共に上昇し初めた。終戦後22年には78万屯となり、年を追つて生産は増大し28年には259万屯弱と戦前戦後の最大を記録している。

明治年代 1,982,166屯(年平均165,156屯)  
 大正年代 9,521,245屯( // 634,749屯)  
 昭和年代(15年以前)5,257,705屯( // 477,973屯)  
 戦時中 不明  
 戦後 12,333,998屯(年平均1,370,444屯)

##### 年別出炭量

年次	大正元	2	3	4	5	6	7	8	9
出炭量	320,238	401,582	443,665	490,910	523,031	598,112	882,218	901,420	872,763
年次	大 10	11	12	13	14	15	昭和 2	3	4
出炭量	662,016	739,924	733,764	762,968	564,192	624,442	—	711,134	628,748

年次	昭 5	6	7	8	9	10	11	14	15
出炭量	490,123	399,607	320,832	361,988	338,912	348,386	409,259	550,909	691,807
年次	昭 22	23	24	25	26	27	23	29	30
出炭量	783,346	866,374	990,703	842,115	1,290,153	1,408,370	2,588,991	2,277,285	1,286,661
出炭指数	60.7	67.1	76.8	65.3	100.0	108.0	104.0	95.0	99.7

(注) 出炭指数は26年基準

## 工業

本県における工業生産額は、年間 535億円におよび当地域の生産額は、300億と56%をしめている。うち電気機械製造業を中心とする金属工業は 250億以上の生産額がある。本地域のみならず本県の工業盛衰は一に電気機械製造業一連の金属工業にあり、その中心をなすものは海岸工場を中心に展開している日立製作所である。当地域の工業を語る場合には日立製作所の日立一連の工場を忘れることはできない。当地の近代工業は日立製作所を中心に発展して来たものであり、日本の電気機械工業の中心地として海外にも宣伝されている。

日立の工業分布は、日立工場市内に所在する海岸工場・山手工場、国分分工場及び勝田市の水戸分工場を総称し他に多賀工場、電線工場、絶縁物工場等がある。いづれも日立工場の分離発展したものである。日立工場は日立製作所の発祥工場であるとともに同社の生産能力の3分の1を占めており、本県電気機械工業の90%以上の生産高をほこっている。

日立工場の起源は大正年代久原鋳業が行った機構合理化のうち日立製作所と日立電力が分離独立され、創業当時40坪の堀立小屋に職工僅か5人だった電気修理工場は発電施設が拡充されるとともに電機機械修理工作部門の拡張により、明治34年日立市宮田字芝内の荒地 4,000坪に総工費9万円で1,267坪の山手工場が新築された。当時は久原鋳業所、日立製作所と呼ばれ、事務所も鉾山と同居で事業の主体も、久原鋳業の附属工場として大正9年まで鉾山諸機械の製作修理に当たっていたが同年2月、資本金 1,000万円の株式会社として独立し第一次大戦の好景気の波に乗り水車ポンプ、起重機、旋風機などの本格的な電気機械の生産態勢を築き、当時全国で使用した水車の13.4%、水力発電機12.5%、変圧器14.8%を日立製品でしめるという大日立の基盤が形造られたものである。後、昭和5年海岸工場、14年多賀工場、16年国分分工場、22年日立電線工場、27年絶縁物工場を分離発展し、総従業員12,300名の人員を要し地域内産業発展の根幹となつている。日立工場傘下、下請工場75工場(地域外8工場)多賀工場傘下69工場(うち地域外13工場)を持ち、29年総生産額は 240億円におよんでいる。各工場は日立

海岸工場を中心に原料或は部品等相互に密接な工程関係を有し、

山手工場 1,000KV A以下の同期機

1,200KW又は16,000H. P以下の誘導電動機

1,000KW又は 1,340H. P以下の一般直流回転機等

海岸工場 1,000KV A以上の同期機

1,201KW又は 1,600 I H. P以上の誘導電動機

1,001KW又は 1,341H. P以上の一般直流回転機等

水車直結交流発電機、受圧機、蓄電機、水車ボイラー、蒸気タービン、化学機械、

国分分工場 配電盤、遮断器等の発送電用電磁器具及び制御装置エレベーター、エスカレーター

多賀工場 交流電動機(標準)、民生用電気機器、計測計器、空気圧縮機、化学機械、光学機械

等に区分される。

下請工場と親工場との関係

日立多賀工場傘下の日立鉄工協同組合所属の工場を依存度により眺めるに、次表の如くなる。

工場種類	工場	受託高の依存割合
機械加工工場	33	48%
プレス製罐メッキ工場	13	19
組立仕上加工工場	12	17
電工工場	8	11
モーター碍子工場	3	5

69工場中41工場は親工場に生産額の全部を依存し、依存率70%以上の工場が11工場となり、専属の下請工場は計52工場で全下請工場の75%となつている。又依存率30%~70%の半専属工場は7工場で全下請工場の10%となる。このことは日立工場傘下下請工場ともいうことができ、電気機械工業を中心とする金属的製造業には依存度が大なることがうかがわれる。

## セメント工業

地域内賦与の天然資源を活用し、近代産業を発達させたものに日立セメント株式会社がある。阿武隈山系の石灰石と粘土、茨城炭田の石炭を活用し、年間ポルトラン

ドセメント22万屯、18億円の産額を持ち、国内には電源開発その他関東、東北地方に固定販路を持ち30年後半より輸出を開始するなど、当地産業としては屈指のものである。稼働能力は月平均27,000屯もあり今後増産が期待される。建設用セメント工業は36工場37,000屯の生産を見、土着産業の粘土瓦製造業は河川流域の沖積地帯の資源を利用し50工場、6,000屯の生産を見、地域内及び県内に販路を開拓している。

### 化学工業及び第一次金属製造業

日立鉱山の開発により明治41年3月大雄院に精練所が建設され、その当時日立駅より金、銀、銅、1ヶ月3,600屯を出荷した。さらに大施設の硫酸工場の完成をみた。大雄院精練所における重硫酸ガスの排水は多賀、久慈郡下の4町24ヶ村に鉱害を出し、大正3年には鉱害補償金20万円(時価2,000万円)に達した。現在はこの重硫酸ガスを利用し排煙硫酸工場を作り硫酸製造を行い年産114,000屯に達し、硫酸亜鉛、硫酸ニッケル、硫酸銅等の年産2,700屯を産出している。

精練所の主要部門の産出額は電気銅19,200屯、掉銅21,600屯、金1,320匁、銀16,800匁、白金24匁等を産出し全国産額の電気銅21%、金16%、銀67%、白金79%、硫酸27%等と産額は国内において優位を示している。銅鉱の需給先を県別にみれば、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県、栃木県、埼玉県、山梨県、長野県、新潟県、静岡県、岐阜県、滋賀県、宮崎県及び茨城県の17県、72鉱山から出荷され、日立鉱山との割合は自山3、他山7の割合となっている。非金属製品は国内各地に出荷され、硫酸は化学工業の源泉として各地の化学工場に年間114,000屯程度出荷されている。副産物の

硫酸焼鉱は岩手県へ10,700屯、神奈川県8,000屯と各製鉄所間に出荷される。

29年製鉄原料硫酸焼鉱需給表 (単位屯)

	製鉄原料用			その他合計	
	岩手県	神奈川県	計		
出荷数	10,729	8,069	18,798	25	18,823

電気銅の販路は地域内において19,000屯、電線等に加工され、残余は国内各地に仕向けられる。

### 木材、木製品工業

製材事業は後背林野を背景に多賀郡、磯原町、高萩市常陸太田市、久慈郡大子町を中心として行われ、製品は建築材を主とし、その5割〜7割は京浜地方に移出され、自余は県内需要をみたしている。一部は地域内小企業により加工され建具として販売されている。年間産額は700千石程度である。

### 紙及び類似品製造業

手漉和紙製造は那珂郡山方町(旧諸富野村西の内)を中心に生産され、原料是那珂、久慈両郡山間に産する良質の和紙原料、楮、三椏であるが特殊紙として用途は限定され124%程度の生産である。昭和30年日本加工紙株式会社高萩工場の創設により今後の増産が期待される。

### 食料品工業

当地域の食糧品工業は魚類加工による漁業関連産業と味噌、醤油、和酒等の製造業に分れ、その総生産額は92千万円程度である。(おわり)

## 昭和30年における人口動態

(県衛生部医務課)

月別	出生			死亡			産 産			婚 姻			離 婚			
	日本人の日本における出生	その他出生	計	日本人の日本における死亡	その他死亡	計	日本人	その他	計	日本人の日本における婚姻	その他婚姻	計	日本人の日本における離婚	その他離婚	計	
1月	5,386	13	5,399	329	1,753	9	2,091	362	—	362	1,121	—	1,121	87	—	87
2月	4,122	14	4,136	233	1,563	15	1,811	355	2	357	1,471	2	1,473	100	—	100
3月	4,328	14	4,342	239	1,618	35	1,892	404	2	406	1,549	2	1,551	117	—	117
4月	3,705	9	3,714	185	1,350	10	1,545	386	3	389	1,543	1	1,544	115	—	115
5月	3,666	16	3,682	161	1,273	10	1,444	348	2	350	1,515	—	1,515	114	1	115
6月	3,294	11	3,305	139	1,219	25	1,383	276	2	278	953	—	953	70	—	70
7月	3,498	7	3,505	114	1,282	24	1,420	271	—	271	992	—	992	71	—	71
8月	3,730	11	3,741	109	1,214	39	1,362	340	1	341	1,197	2	1,199	103	—	103
9月	3,353	8	3,361	109	1,192	39	1,340	341	—	341	1,007	2	1,009	94	—	94
10月	3,512	13	3,525	121	1,243	19	1,383	271	—	271	1,263	2	1,265	86	—	86
11月	3,366	8	3,374	152	1,404	58	1,614	326	1	327	1,276	3	1,279	75	—	75
12月	3,718	7	3,725	222	1,460	28	1,710	348	2	350	1,847	—	1,847	102	—	102
計	45,678	131	45,809	2,113	16,571	311	18,995	4,028	15	4,043	15,734	14	15,748	1,134	1	1,135

# 交通事故の原因について調べてみよう

真・新治中学校 第三学年

高橋紀久代

## ○研究の目的

たのしい思い出をつくるはずの修学旅行で、思いがけない交通事故のため、多くの死傷者を出したひさんな事件がたびたび起りました。洞爺丸の事故で、1,200名の死者を出したその半年後の昭和30年5月11日には紫雲丸が第三号丸と衝突して、数分間で沈ぼつ、多数の死傷者をだしました。その他、自動車の事故によって尊い生命を散らしてしまうこともたびたびあります。

これらの交通事故は何によって起るのか原因をさぐり再び事故をくりかえすことなく、楽しい社会を建設するためその方策を考えてみたいと思う。

### 一、年々ふいる事故

- 1953年と1954年の事故の比較1954年には事故の件数が1953年より13,850件も多くなっています。1954年の交通事故を1日に平均すると、事故数は257件、死者17人、負傷者198人、物的損害5,581千円になります。結局5分ごとに全国のどこかで事故が起きていて、7分ごとに1人の死傷者が出ていることになります。

第一表

事故の年度別比較

種別	1953	1954	増加
事故件数	80,019	93,869	13,850
死者	5,544	6,374	830
傷者	59,280	72,390	13,110
物的損害(千円)	1,581,675	2,018,949	437,274
自動車台数	1,025,894	1,311,781	285,778

(警視庁、警ら交通課調べ)

- 20年～29年の事故発生数

第二表

交通事故の数はものすごくふえている

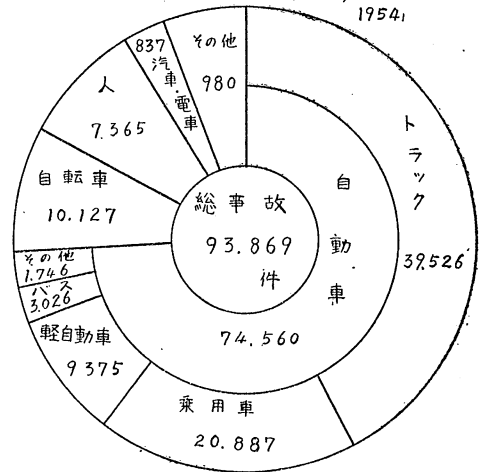
年 度	件 数	年 度	件 数
20	8,706	25	33,212
21	12,504	26	41,423
22	17,778	27	58,487
23	21,341	28	80,019
24	25,113	29	93,869

(警視庁資料)

第二表でわかるように次から次と、いたましい事故がたえないありさまです。この世の「交通じごく」とい

われるようなわるい状態になっています。第一図により、自動車による事故が一番多いことがわかる。すなわち全体の約2/3が自動車である。

第一図  
自動車がかもつとも事故をおこす



## 二、事故の原因

どうしてこんなに交通事故がふえたのかいろいろ原因がありますが、何といつても自動車の数のふえたことです。全国の自動車の台数は1954年9月で1,296,160台になっています。このうち東京都内は、217,299台もあり(毎月3,500台づつふえています)、これは1938年の10倍にもなります。又自動車が街頭にあらわれはじめた1911年にくらべれば、1,200倍にもなります。

1. 自動車の事故数

この自動車事故を、自動車の用途別、又自動車の使用者別に見ますと次のようになっています。つまり事故は用途別ではトラックが一番多く、その次が乗用車、バスとなっていて、使用者別では、都会ではタクシー(タクシー全体のが1/3事故を起している)地方ではオート三輪車が多いことがわかります。

2. その原因

その原因をさぐつてみると

- 除行しなかつた時とか追いこそうとした時などが多い。
- 操縦者が未熟練だつたり、よつばらつていたり、

いねむりをしていた時にもおこります。

- c. 車の状態からみても、1953年頃から大型バスがどんどん使われ、観光や修学旅行などに大いに使用されているのに、それに対して道路が良くなっていない。このために起った事故が多い。
- d. 歩行者側の不注意、特に車のすぐ前とか後を横断したり、よつばらつて歩いたり、道路で子供の遊んでいたこと。

### 三、交通事故はどんな時に起るか

#### 1. 時間からみて

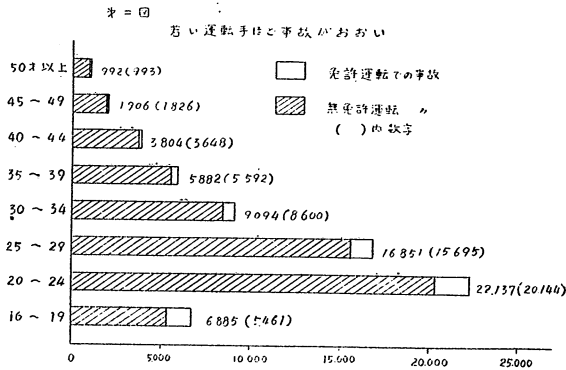
交通事故が起きやすいのは自動車、歩行者、自転車とも午後三時から午後五時の間が最高で、朝早くやおそくなると少なくなります。午後三時すぎは一番交通がひんぱんなうえに朝から走り続けている自動車など、運転手がつかれているために事故がおき易くなるのでしよう。

#### 2. 天気からみて

統計の上では晴れた日が一番多く、その次は曇り日について雨の日となつています。もつとも一年中で晴れの日が一番多くて、曇りの日が少ないのですから、晴れた日に事故が起りやすいとはいえません。どちらかと言えば雨、霧、雪の日は事故が起きやすいといえます。これは視野のきかないことや道路がぬれて、すべりやすいことが大きな原因でしょう。

#### 3. 運転者の年令

事故を起した運転手の年令をみますと、20~24才が一番多く年をとるほど少なくなつています。これはまだ若く感情が落ちつかない人や技術の十分でない人が多いからでしょう。



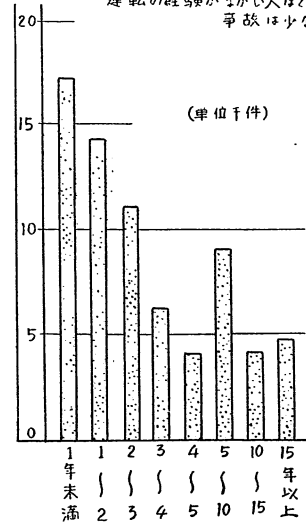
#### 4. 無免許運転

無免許運転で事故を起した人のうち、16才から19才が非常に多く全体の17%もあります。小型貨物や軽自動車はわりあい簡単に運転できるため、免許をとらないで運転をして事故を起しています。このためオート三輪の事故が多いのでしょう。

#### 5. 運転手と経験年数

経験年数の多いほど事故数が少なくなつています。このため、このころ東京では「メータクに乗るなら中年以上の運転手の車をみて乗れ」といわれるほどです。

※ 三 図 運転の経験から若い人は事故は少ない



### 6. 交通事故の死者

傷者 年令別にみて、一番多いのは男女とも20才から24才までの人たちで、25才から29才と6才未満の子供がこれに続いています。20才代の人が多いのは、外にでて仕事をする事が多く、自動車や自転車に乗ってかけ回ることが多いからです。6才未満の子供がこれに続いているのは、子供が道路で遊

んだりひとりて町を歩き回るために起きやすいのです。6才から8才までの事故は、やはり道路の上で遊ぶことと、道路を横断するときの不注意が原因になっています。(第4図参照)

### 四、交通事故をなくすには

このような交通事故をなくすには、どうしたらよいでしょうか。まず第一に踏切をつくること。できれば立体交差にする。

#### 1. 運転手の疲労をなくす

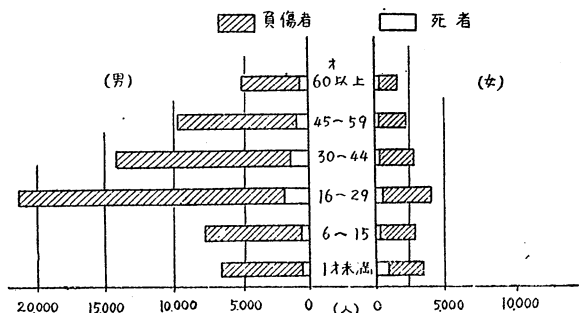
タクシー業者がたくさんでき、タクシーがふえたため競争になります。だから早くひとりの客を送つて次の客を乗せようとおせつてしまいます。こうして、運転手は神経をあげしく使いながら、休まず働くために疲労して運転も不安定になります。このように、運転手が過労にならなくてよいようにすることが事故を防ぐ根本の方法です。

#### 2. 人命尊重の観念を養う

運転する人も、タクシー会社の経営者も金もうけだけでなく、大事な「人の生命」をあずかっているということに、まず心を使うことが必要です。この研究のために次の資料を参考にいたしました。

「少年朝日年鑑」 昭和30年版  
「図説、社会科年鑑」 昭和31年版

※ 四 図 何才の人が交通事故をおこすか(1954年)



# 新市町村の横顔

## ほこた 鉾田町

### 1. 沿革

この町は鹿島郡の北部に位し、東は太平洋、南は北浦の北端に面し、鹿島、行方の水郷地帯に入る水陸交通の要地として昔から発達したところである。昨年3月15日に旧鉾田町と巴、徳宿、新宮、秋津の4カ村が合体し、さらに8月10日に旭村(旧夏海村)の一部を編入して、面積104.53平方町、人口29,721人(男14,426、女15,295)、世帯数が379を有する広大な町として再発足したのである。昔この地方は那珂国造および海上国造の所領であつたが、後世水戸藩の領地となり、巴川附近を中心に水運の便が開けていたらしく、今でもその当時の宿場の面影が残っている。今では県の鉾田支所、土木事務所、保健所、職業安定所や簡易裁判所、統計調査事務出張所、各種銀行支店、民間バスの営業所などがあつて、この地方における行政、産業、経済、教育の中心地をなしている。またこの附近には釣り場が多く水戸、石岡附近からも天狗連が集つて来る。

2. 産業 まず農業面をみると、農家戸数8,755、農家人口22,832人(男11,119、女11,713)、耕地面積は水田1,079町、畑3,279町、樹園地39町、桑園38町、山林1,765町(民有)、原野161町にのぼり、中でもさつまいもが約1,485町、らつかせい310町も栽培されており、諸作地帯といつても過言ではない。

次に畜産面をみると、乳牛335頭、役牛1,877頭、馬327頭、豚1,604頭、山羊298頭、めん羊36頭にわたり26,712羽、兎570頭の多数にのぼり、特に徳宿の舟木には酪農経営農家が非常に多く、将来の発展を嘱望されている。また養蚕戸数も約200戸あつて、年間約4,500メの取高をあげている。

次に水産業をみると、内水面では北浦および巴川を利用する者が多く個人経営75、団体経営1で年間約8,000メの漁獲をあげているが、中でもわかさぎ約1,000メ、ふな約3,000メにのぼり、海水面では個人経営21、団体2に過ぎず、漁獲高も蛤の2,000メを除いては僅かにまわいわし、あち、たこなどがある。

次に商業面をみると、法人および常用労働者を有する個人商店が60、従業者233名、年間販売金額1億6,000万円、常用労働者のいない商店346、従業者583名、8月中の販売金額5,300万円に達している。工業面をみると事業所数36、従業者数305名、年間出荷金額2億3,500万円にのぼっているが、特に澱粉製造工業は15に達し、おもに原料は地元産のさつまいもを使用し、製品は京浜方面へ出荷している。

3. 教育文化 ここには高校2、中学校5、小学校13があつて、高校生1,369名(男776、女593)、中学生1,909名、小学生も894名にのぼつており、公民館は七つあつて青年、婦人団体の活潑な運動を展開している。たとえば各地区とも子供会やレクリエーション活動、機関紙の発行などを通して新生活運動を推進している。特に旧巴地区は模範的な事業を実施しており、冠婚葬祭の簡素化やはえ、蚊の撲滅運動は優秀な成績を取っている。また全町に剣道や柔道、野球などが普及していることが目立つている。名所、旧蹟としてはまず巴地区の鳥栖に浄土真宗24輩の第三番鹿島順信法師が寄寓した無量寿寺があり、徳宿地区には徳宿権守にゆかりの深い徳宿城址、鉾田地区には本願阿弥陀如来を安置する法道山根本寺三光院、塔ヶ崎には安産守護の本尊として多くの参詣客が集る十一面観音堂などがある。また新宮地区の畑田には足利時代に畑田太郎の居城であつた畑田城址がある。

### 昭和31年歳入歳出予算(当初)

#### (歳入)

町税	地交付税	地方譲与税	公営企業および財産収入	使用料および手数料	国庫支出金	県支出金	寄付入金	繰入金	繰越金	雑収入	町債	計
43,765,930	20,070,000	1	6,673	260,000	2,382,665	1,300,505	2,200	1,000	96,696	4,500,000	72,383,672	

#### (歳出)

議会費	役場費	警察消防費	土木費	教育費	社会労働施設費	保健衛生費	産業経済費	財産費	統計調査費	選挙費	公債費	諸支出金	予備費	計
2,262,255	18,791,708	5,450,786	4,783,125	18,980,670	1,254,122	2,284,480	8,694,730	592,100	368,180	331,960	451,646	7,737,910	400,000	72,383,672



## 一 隨 想 一

### お か め 八 目 と 天 狗

最近『おかめ八目』という言葉が一般に流行してきたが、ただ傍観的態度を保つて何らの自主的行動をとらないとか、また第三者として冷かし半分で傍観することと間違えやすいようである。これは誠に悪い傾向である。特に最近各地において囲碁熱が盛んとなり、囲碁の愛好者が日増しに多くなっているから、この言葉もますます流行するだろうから、ここでひとつ『おかめ八目』の正しい意義を考えてみよう。辞典を引いてみると、『おかめ』とは他人の所作を傍らみていることをいい、『八目』とは囲碁の場合八目も先を眺みとることであるという。すなわち傍らにいて他人の囲碁をみていると、対局者同志よりは勝負に対して冷静であるから八目も先の勝負がよく観察できるというわけである。何事もその第三者的立場、すなわちあくまでも客観的な立場に立つて物事を冷静かつ慎重に観察すれば、その是非や得失が明確に分るのである。往々にして私たちは、自分の考えていることや現在やっていることは必ず正しいものと考えたり、あるいは必ず良いことのように思っている。そしてそれが立派に成功するものと信じていることが常である。真に正しい理性的判断によつて、事の善悪を決めて熟慮断行することは、人間の行為として最も正しいことであるが、私たちはたまたまこの理性を忘れて邪欲のために行動してしまうことが多いのである。俗に天狗といわれるのは、自負心の強い人とか、あるいは虚栄心に富んでいる人のことであろう。正しい意味の負けず嫌いならば、堅忍不拔の精神を陶冶するのに囲碁が最適かも知れない。また囲碁は『急がば廻れ』とか、武蔵流の『肉を切らして骨を切る』とかいう昔からの諺にもあるような処生術や戦術を養うのにも非常に適しているだろう。昔の武士や参謀将校たちが囲碁を愛好した訳も、このよ

うなところにあるのかも知らない。しかし囲碁にはもつと深い意義があると思う。それはお互いに腹を打割つて卒直に意志の疎通を図るとか、邪欲を抑制して無我の心境に入り、人格を陶冶修練するために大変役立つのではないだろうか。たとえば、囲碁の場合に分不相応の石を打つたり、ヤマをかけたり、目先の欲に迷つたりすると必ず失敗する。そのために囲碁では正しい布石の上に筋の通つた攻合いや寄せを行うことが最も大切である。これは私たちの人生についても、そのままいえることである。閑静な日本間で泰然自若として正座し、互いに無我の心境になつて白、黒の石を一つづつ置いて行くことは、実に人生最高の幽雅な境地を切開く道ではないだろうか。人によつて囲碁は非衛生的だとか、健康人のあることではない、碁打ちは親の死目に会えないなどというかも知れない。これは余りにもひどい偏見ではないだろうか。それはかけ事の麻雀、花札などと同じようなものと解釈しているために出てくる問題であり、頭からの食わず嫌いの感がする人々のいうことだろう。囲碁の勝負は白黒の石を同じように、同じ数だけ使用して公開の盤上で攻合いをするのである。これほど公明正大な勝負はないだろう。これには奸策や不正の働く余地がないのである。囲碁ではやはり科学的な合理性を持った戦法を用いなければ到底勝つことはできない。余り囲碁のよい点のみをとりあげて吹聴すると、また天狗だといつて叱られるかも知れないが、やはり囲碁にもそれ相応の欠点もある。それは一回の勝負に時間がかかり過ぎるとか、他人に迷惑をかけやすいことであろう。天狗といえど釣の方にもこのようなアダ名があるようである。自分のところが一番釣れると思つたり、「今度は釣れる、この次は釣れるだろう」となかなか腰を上げない。また釣

り落した魚は誰にも大きい印象を与えており、釣った魚よりは逃げた魚の話に花を咲かせるのが常である。囲碁の場合もそうである。私たちが局部的な5、6目の攻合いに熱中して負けると『しまった』と独り言をいつたり、「あの石がまずかつた」とか、「はじめやろうと思つたがやり直したら負けた」とか、いろいろと愚痴を並べるのが常である。これは魚釣りや囲碁の場合には余りにも神妙な心境で黙々と全神経を集中させているからその反響が大きいのでしょう。その証拠には魚が沢山釣れたときとか、囲碁の攻合に勝つた場合の喜びは突に大きい。私たち凡人は有頂天になってしまう位である。余りにも有頂天になり過ぎて次は失敗してしまうこともある。私たちはたまたま5、6目の局部的な攻合いに執着して、互いにしのぎを削っているうちに、知らず知らずの間に別の大きい陣地が狭められたり、元も子も無くしてしまつたりするのである。囲碁はあくまでも大局の見地に立つて攻合いを総合的に展開することが肝要である。これは単に囲碁ばかりではないが、特に私たち人間は独断的になりやすく、利己心を働かして、知らず知らずの間に他人へ迷惑をかけてしまうことが多い。心理学にいう『自己意識過剰』のために他人のいうことや、他人のなすことが全部悪いように感違いしやすいのである。これは誠に悪いことである。特に団体生活や団体活動をする場合には注意しなければならない。たとえば会議が余りにも民主的になり過ぎて、議論百出して誰も多数決に従わなくなると大変である。そうすると民主的な会議の存在理由もなくなり、多くの良心的な発言者は本当に迷惑するのである。さらに議事が紛争したり、混乱してくると遂には暴力の出現となり、『無理が通つて道理引込む』ようになる。そして『物いえば唇寒し』の暗い社会ができて上つてしまう。このような時代逆行の傾行はお互いに排撃しなければならない。それにはお互いの心の中に平和を愛好する精神を深く刻み込まなければならないのである。そしてお互いの心の中から残ぎやく性を取除かねばならない。私たちは日常生活を送るに当つては、あくまでも冷静かつ慎重に物事を処理する習慣を作らなければならない。すなわち一人一人が科学的な物の見方に慣れて、人間性と合理性に富んだ仕事をするのである。そして他人事には必要以上に関係したり、干渉することを避けるようにすべきである。あくまでも人間はお互いにそれぞれの人格と良識を持つて生活しているからである。

私たちは他人の言動や生活を中傷したり、干渉するこ

とは慎まなければならない。私たち日本人は、他人のことに干渉し過ぎるのではないだろうか。たとえば隣組内においても世話好きの内はまあ良いが、寄ると障ると他人の噂や陰口を叩く人がある。また会社や役所の中でも、他人の出世や成功を羨んで、揚足をとつたり中傷したり、ざん訴したりして自分だけ〔良い子〕になろうとする浅ましい人が少くない？民主化された新しい日本人として、お互いにその人格や人権を尊重し合つて明るい生活をしたいものである。他人に迷惑することや他人の名誉を傷けたり、相手の感情を害するような発言や行動は厳に戒め、そしてお互いの自主性を尊重しなければならないのである。特にお節介や世話好きな人たちは十分注意して貰いたいものである。お互いに注意し合うことによつて、隣組も職場も余程住みよく楽しいものになることだろう。それを大きくすれば、平和で明るい社会が生まれ、人間性を尊重する文化国家が作り出されることになるでしょう。

ちよつと話が脱線したけれども、科学的な合理性に立つて物事を観察することは単に囲碁ばかりでなく、あらゆるものに通ずるものであろう。ことに原子力時代の中へ新しく文化国家として誕生した日本においては、特にそれが必要である。正しい意味の『おかめ八目』も、その科学的合理性に基いたものといえるでしょう。第三者には夢中で攻合っている白、黒の当事者には、到底気付かない急所がよく分る場合が多いのである。特に中盤戦に入るとその傾向が傾い。また恋人同志が喜びと幸福感のために夢中で交際していたけれども時が経つに従いだんだん相手の欠点や性格などが分つてきて嫌気がさしたり、後悔を感じるようになって別れてしまう例が少くない。ある学者は恋愛の期間を半年の位が最も適しているという。盲目的な愛情に走り、理性的判断力を持っていないのであるが、お互いが愛情の責任を感じて譲り合い、理解し合い、尊敬し合つて結婚への道を切開き、新しい幸福を創造するように努力すべきではないだろうか？やはりそこには人間性に立脚した冷静な心境と正しい判断力が必要なのである。すなわち客観的立場にあつて物事を処理する習慣を作るべきである。そして私たちはあくまでも独善的な行動や皮相的見解、場当たり式発言などは避けなければならない。そこにはじめて新しい希望の花が開き、立派な実が結ばれるのである。『おかめ八目』も是非このような新しいモラルの創造のために役立てて貰いたいものである。(YN生)